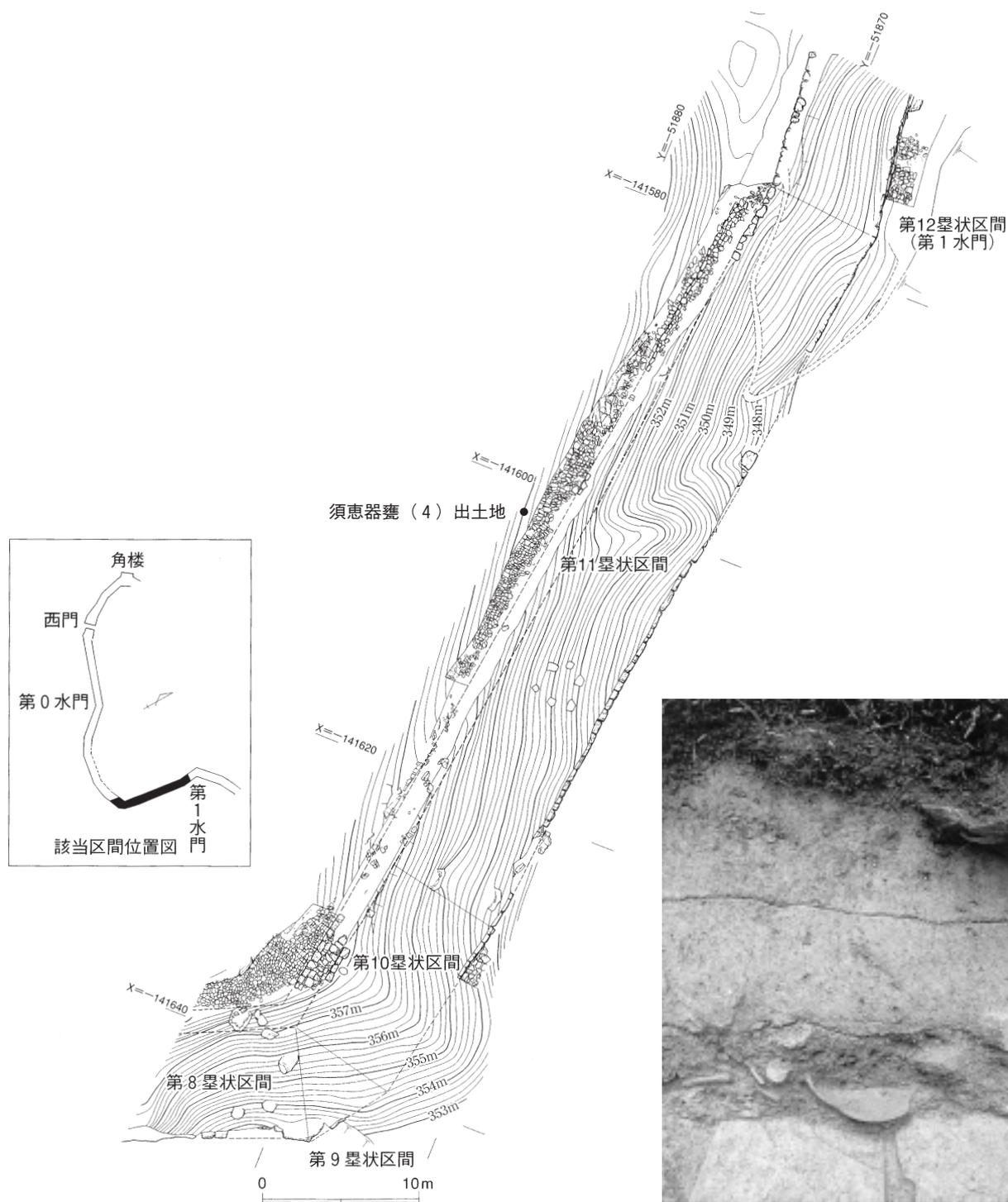


第4節 出土遺物

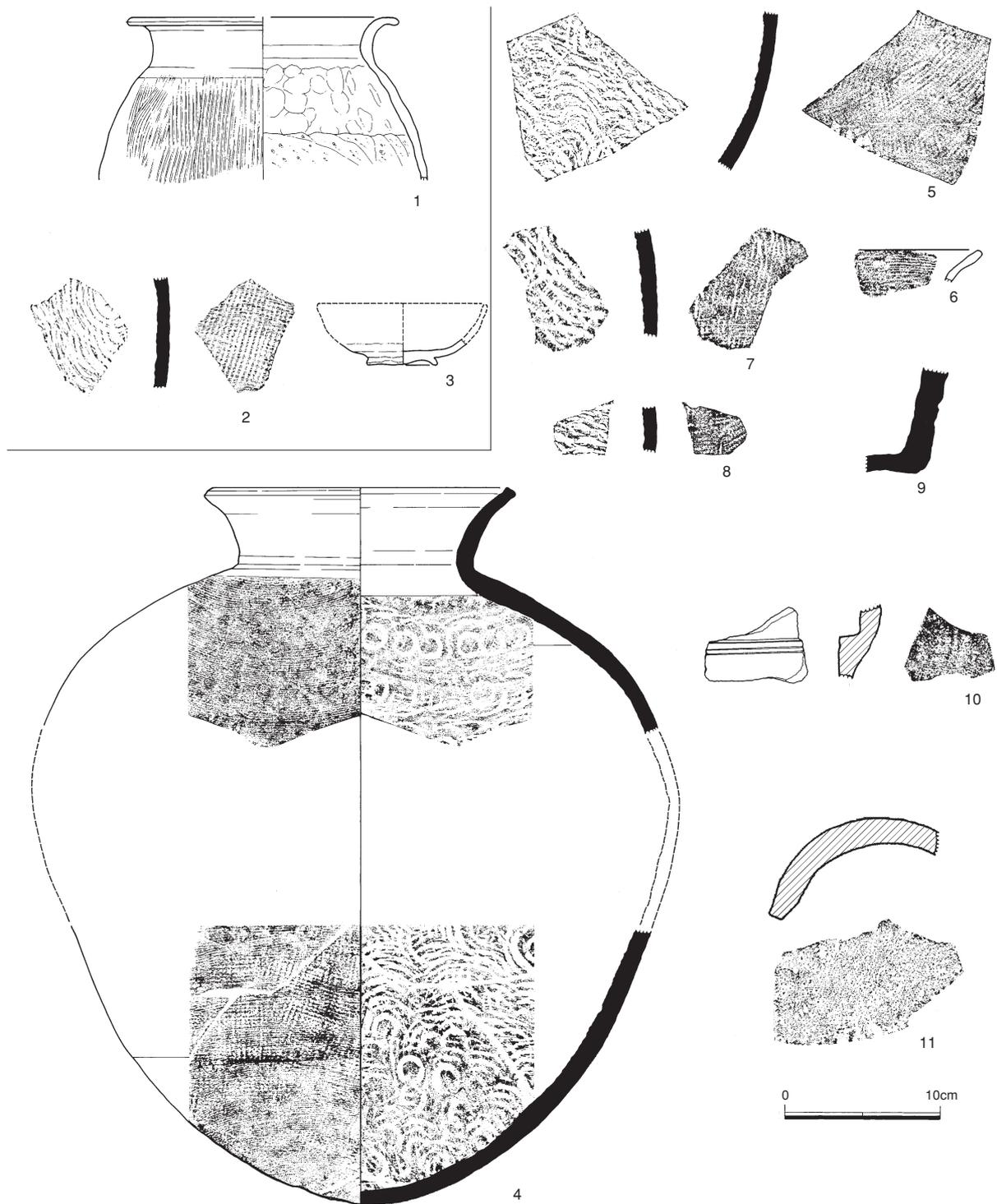
1、概要

平成16年度に実施した第1水門貯水池の確認調査では、(1～3)の遺物が出土し、第11壘状区間では城内側敷石の埋め戻し作業中に、山側の堆積土から(4)の須恵器甕が出土した。また、各壘状区間で表採した遺物(5～11)や、鉄器保存処理の終了した有袋鉄斧を掲載した。



第31図 第9～11壘状区間 平面図 (S=1/400)

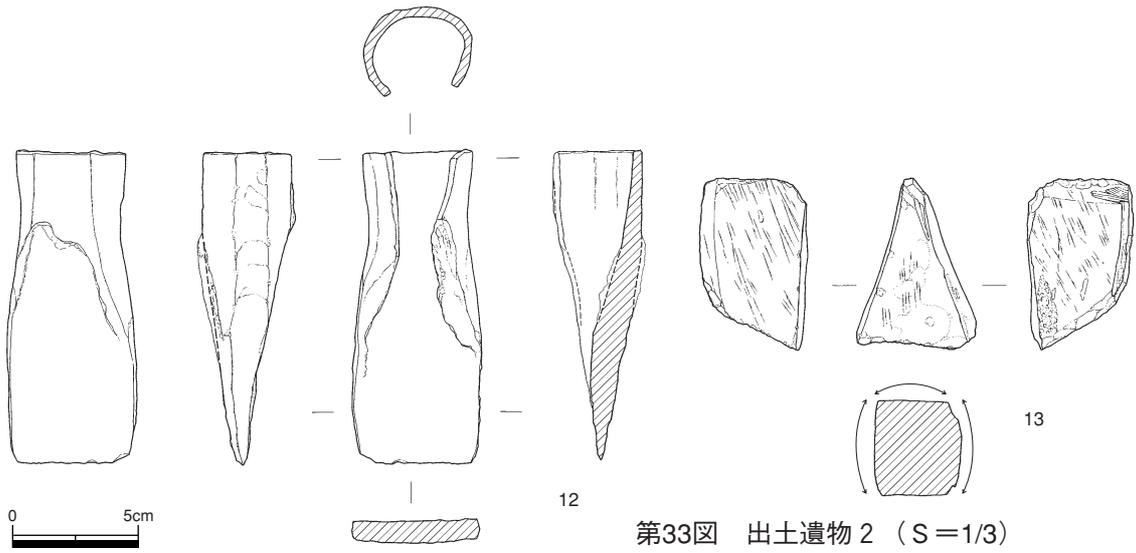
第18図版 遺物出土状況



第32図 出土遺物 1 (S=1/4)

2、出土遺物

(1) の土師器甕は第1水門貯水池の下層である13層から出土した。口縁部は外反し、なで肩となる体部には外面にあらいたてはけ調整を施し、内面は下位に左上がりのへら削り後、上位に指押さえとナデを行っている。色調は橙褐色を呈し、胎土には3mm以下の長石や石英がふくまれ焼成は軟質である。(2) の須恵器甕は褐灰色砂質土(6層)から出土した。外面は平行タタキ(3本/cm)の後、カキ目調整を施し、内面には同心円タタキが残る。焼成は良好で灰白色を呈する。



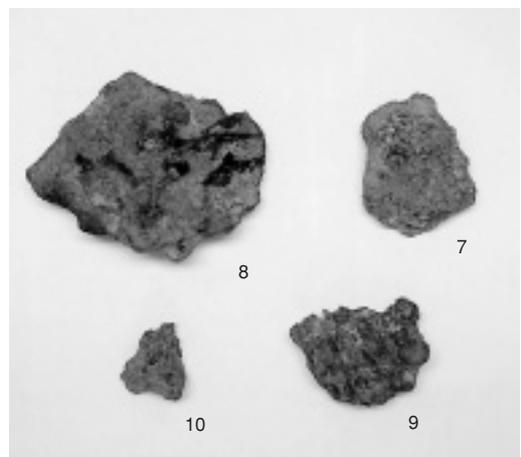
第33図 出土遺物 2 (S=1/3)



第19図版 須恵器甕 (4)



第20図版 有袋鉄斧 (12)



第21図版 P32の鉄滓 (8、9、10) と羽口 (7)

(3)は吉備系土師器碗の底部で、高台径4.3cmを測る。焼成良好で、胎土は細かく色調は黄白色を呈する。高台が縮小傾向にあり坏部も器高の低い形状と考えられるため、時期は13世紀末に比定される。(4)の須恵器甕は第11壘状区間の城内側に位置する山際を清掃中、城内側敷石上から出土した。平成13年度の調査においても、須恵器甕等が出土しているため、城内側には何らかの遺構が存在すると予想される。体部上半はほぼ完存し、底部付近は1/6程度の残存のため、図上復元を行った。口径18.8cm、頸部径15cmを測り、復元高は46cm程度と思われる。口縁部は外反し端部をわずかにつまみ上げ、大きく広がる肩部の最大径は体部の上位にあると見られる。口縁部の内外面は回転ナデで仕上げ、肩部の外側はカキ目調整(8本/cm)を施す。内面は同心円タタキの後、ヨコナデで一部すり消している。体部下半の外側は格子目タタキ(4本/cm)の後、カキ目調整を施し底部はマメツのため調整が消えている。内面は同心円状タタキが顕著に残る。焼成はやや不良で黄灰色を呈し、胎土には1mm程度の石英が多く含まれる。なお、同じ位置から土師器甕小片が出土している。

(5)の須恵器甕は、突出部である通称屏風折れの石垣において、義則敏彦氏により表採されたものである。外側は平行タタキ(3本/cm)、内側は同心円状タタキであり、焼成は堅緻で淡灰色を呈する。(6)も突出部から表採した土師器甕で、口縁部内面にヨコハケを施している。

(7)は第76壘状区間、(8)は第58壘状区間で表採した須恵器甕である。外側は(7)がタテ方向の平行タタキ(4本/cm)のちカキ目調整を施し、(8)は格子目タタキが認められる。

(9)は平成15年度に西門の表土除去を行った際、出土した備前焼壺の底部片である。外側には2状の沈線が認められ、底部はへら削りで仕上げている。焼成は堅緻で、灰白色を呈し胎土は細かい。

(10・11)の丸瓦は、第Ⅱ群礎石建物において表採したものである。(10)は玉縁式丸瓦の小片で、凸面に浅い沈線が認められる。焼成不良で灰褐色を呈し、胎土には3mm以下の砂粒を多く含む。(11)の丸瓦は凹面、凸面ともマメツが著しく凹面に布目圧痕がかろうじて観察できる程度である。焼成不良で褐色を呈し、胎土には5mm以下の砂粒を多く含む。

(12)の有袋鉄斧は、平成12年度に実施した城壁線の確認調査の際、第1～第2水門間に設定したT38の埋土から出土したものである。出土時には鏝が厚く固着しており、正確な数値が計測できずにいたが、保存処理が終了したため再度図化した。

有袋鉄斧は全長12.6cm、刃部幅4.6cm、最大厚1.4cm、袋部外径4.4cm、厚さ約4mm、内径3.7cmを測り、重量は175.6gである。袋部は左右の折り返しが「ハ」字状にひらき、幅は1.3cm離れている。刃部は茎部との境が最大厚となり、刃先に向かって徐々に薄くなり両刃である。刃部の側面は鍛打によって整えられ、一部袋部まで面をもっている。

有袋鉄斧の属性として、袋部の底が最大厚となり、「ハ」字形に開く折り返しとの端が一致することが挙げられる⁽²⁾。

(13)は砥石で、第1水門から第2水門間の城外側において、高橋進一氏により表採されたものである。砥石は四角錐状に先端が尖り、3面が研磨されて平滑となっている。先端部分には線状にくり込まれた長さ1.8cm・幅1.5mmの研磨痕や、長さ4cm・幅2mmの研磨痕が認められる。砥石の全長は6.9cmを測り、重さ111.8gである。

註1 『総社市埋蔵文化財調査年報』11、総社市教育委員会、2001年

註2 金田善敬「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17集、古代吉備研究会、1995年